

島崎藤村文芸とキリスト教

細川正義

一

島崎藤村は明治二十（一八八七）年九月に現在の港区白金台の明治学院普通学部に入學した。明治学院は、東京一
致神学校、東京一致英和学校、東京英和予備校の三校が合併して明治十九（一八八六）年に開學されたキリスト教主
義教育をベースにした学校で、藤村も入學の翌年六月に、高輪台町教会で木村熊二より洗礼を受けた。しかし藤村の
クリスチャンとしての生活は明治二十一（一八八八）年の受洗から、明治二十六（一八九三）年一月に教会へ退籍届を
出て関西漂泊の旅に出るまでのわずかに四年余りであり、周知のように藤村は後年、自らの青春への回想を基にして書
いた『桜の実の熟する時』の中で、当時の信仰体験について触れているが、そこで主人公の入信の動機について「実
に浮き浮きと楽しい月日を送った」明治学院の学生時代に、「半分夢中で洗礼を受けた」と述懐させていて、捨吉の
ことを

彼自身の若い信仰は詩と宗教の幼稚な心持の混じ合ったやうなもので、大人の徹した信仰の境地からは遠いものだった。彼の
基督はあまりに詩的な人格の幻影で、そこが彼自身にも物足りなかつた。（十一）⁽¹⁾

と描いている。さらに、捨吉の当時の心境として

捨吉が幼い心の底にある神とは、多くの牧師や伝道者によつて説かる、父と子と精霊の三位を一体としたやうなものでは無かつた。(略) 有体に言へば、エホバの神とはあの三十年代で十字架にかゝつたといふ基督よりもつと老年で、年の頃およそ五十ぐらゐで、親しい先生のやうでもあれば可畏いお父さんのやうでもある肉体を具へた神であつた。半分は人で、そして半分は神であるやうな斯の心像、捨吉は旧約的な人物に想像せらるゝやうな風貌を賦與^{ついで}へて居た⁽²⁾

と記している。従来藤村のキリスト教受容の問題を扱つた論の多くがこの捨吉の述懐を拠り所として、藤村の信仰は「藤村のキリスト教への接近は、(中略) 明治学院という環境の特異な雰囲気による多分にムード的なものが地盤をなした。」(長谷川泉)⁽³⁾といった形で、本来的信仰受容という点からは捨象して論じられた。その代表的な見方として、かつて三好行雄らと行つたシンポジウムで、佐藤泰正氏はこのように述べている。

やはり内実の問題としては藤村の場合はキリスト教の問題が、本質的にどれだけ深く食い入つたかという点と、それは過小評価という点、あまり肯定できないというふうに思います。そこに逆に藤村の体質があるといつてもいい。ですから「聊か思ひを述べて」でも、はつきりと〈とづくにの神〉というふうに申しております。「招かば来り給はざることなき、とづくにの神」もこの国の人情とか、この国の自然、風土のなかでは、いつの間にか神殿をからつぽにして立ち去つていくという。あそこにはつきりひとつ批判的な問題が出てくるわけです。藤村にとってはやはり異国の神でしかなかったという問題が、それなりにあると思います。⁽⁴⁾

つまり、佐藤氏は、藤村にとってキリストは、結局は「異国の神でしかなかった」のであり、信仰体験も表面的、あ

るいはムード的な接近でしかなかったという見方をしているのである。

藤村がキリスト教信仰に入った明治二十一年は同年三月に『新撰讃美歌集』が刊行され、同じ月に北村透谷が日本基督一致教会数寄屋橋教会で洗礼を受けている。近代日本が明治十年代に入り欧化主義が積極的に取り入れられるようになり、それに伴ってキリスト教の信者も急速に増えていき、明治二十年に入るとプロテスタント信者だけでも二三〇〇〇人を超える数字になってきた⁽⁵⁾。鹿鳴館に象徴される強熱の欧化主義が去って国粹主義が盛んになってもキリスト教信者は以後もかなりのスピードで増加していった。理由の一つに、キリスト教がヒューマニズムの立場において、近代日本の青年たちに歓迎されたことや、明治三二(一八七〇)年に横浜にフェリス女学院が開設されて以後、各地にキリスト教主義の女学校が設立され、女性の民主的開眼を促していったことも影響を与えていたであろうことが推測できる。そうした機運の中で青年層を中心にキリスト教が新時代の象徴としてかなりムード的な関心の中で浸透していったことがうかがえるのであるが、明治学院に学び、近代日本文化の最先端であった銀座四丁目にあった吉村忠道家に世話になり、明治十九(一八八六)年には短い期間ではあったが共立学校で学び木村熊二から教えを受けた藤村が、そうした当時の傾向であったムード的な接近によってキリスト教に入信したという見方は推測に難くないところである。

しかし、一方で、例えば藤村は、「五十年の足跡」で、二十二歳の頃を振り返って

二十二才の春感するところがあつて基督教会の籍を退いたので、その頃宗教事業に身を投じようとしたが果たさなかつた。⁽⁶⁾

と述べ、更にそれを示す例として、藤村は、明治二十三(一八九〇)年七月に明治学院で開催された第二回と二十五

年七月に箱根で開催されたキリスト教夏期学校に熱心に参加していることは注目しておくべき点であろう。これは後年の回想になるが、『桜の実の熟する時』で、

御殿山を離れる前に、もう一度捨吉はそこいらを歩き廻った。山のはづれまで行つて、独りで胸の塞がつた日にはよく其辺から目黒の方まで歩き廻つたことを思出した。(略)ふと、思ひもかけぬ美しいものが捨吉の眼前に展けた。もう空の色が变りつゝ、あつた。夕陽の美は生れて初めて彼の眼に映じた。捨吉はその驚きを友達に分けようとして菅の居るところへ走つて行つた。友達を誘つて来て復た二人して山のはづれへ立つた頃は更に空の色が变つた。天は焰の海のやうに紅かつた。驚くべく広々とした其日まで知らずに居た世界がそんなところに閃いて居た。そして、その存在を語つて居た。寂しい夕方の道を友達と一緒に寄宿舎へ引き返して行つた時は、言ひあらはし難い歡喜(よろこび)が捨吉の胸に満ちて来た。(7)

と触れている。『桜の実の熟する時』では、明治学院で開催された第二回の夏期学校に参加して、最後の日の懇親会が終わつた後で友人と二人で体験したこととして描いているが、伊東一夫が指摘しているように(8)、これは、藤村も参加した第四回の夏期学校で校長を務めた本多庸一が行つた「演説」の中の

私共はどうか此の山水を一種の書物として之の読^マみたいものでございます、之を一種の天啓として読みたいものでございます。先輩も申します「我々には二冊の聖書がある二種の天啓がある、一種は即ち聖靈に示されて居る人達の手になつた聖書、是れは預言者の手に成つた聖書である、他の一種は即ち神の手で自ら天地間の方則に依つて御築きなされた所の山水である、」私共は只今聖書に依つて預言者の手に成りました所の聖書も持て居ります、併し今又私共直接に明媚なる山水に接して居る、唯た見るばかりでなく此の山水の文字の裏にある所のものを読みたいものでございます、此の山水の奥にある所の山水の主人も知りたいものであります、(中略)山水の主人となり基となつて居る所の神に交りたいものでございます、神に

事へたいものでございます、(略)⁽⁹⁾

と語られた「キリスト教的自然観」(伊東一夫)に影響された文章であることが推測できる。『桜の実の熟する時』が大正三(一九一四)年から七(一九一八)年にかけて書かれた作品なので、藤村が青春時代に体験した事実通りでないの言うまでもないが、しかし、一〇日間以上続く夏期学校に熱心に参加して、当時の日本を代表する宗教者たちの話を聞き、『桜の実の熟する時』の捨吉と近い体験をしたというなら、かれのキリスト教への接近は、かなり真剣なものであったことが推測できる。

藤村は、明治二十六年一月末に所属する麹町一町教会へ退籍届を出して、勤めていた明治女学校も退職して、関西漂泊の旅に出るが、その時にも、「かたつむり」に「聖書と普門品^{ふもんほん}二十五を笈中に残して須磨の故跡を訪づれ」と書きとめているように、教会は退いても「聖書」は携えて旅立っているのである。笹渕友一はこの点を踏まえ「教会からの脱会教会への反逆やキリスト教からの離脱といふ意識を伴ってゐたわけではない。」⁽¹⁰⁾として、離教後の彼が新たに「キリスト教を媒介として人間性を内面化」していった点を注目されている見方は見逃せない。

そのような藤村のキリスト教体験や聖書との関係を見ると、例えば、森有正が

キリスト教は文学の材料としてその中に消化吸収せられるに甘んずるものではなく、従って単に文学的内容であるばかりでなく、文学的創造活動の根源にあつてそれに生命を与え、その方向を決定するものであることが明らかになるであらう。⁽¹¹⁾

と述べているように、藤村において、キリスト教との出会いは、確実に彼の命根に息吹を与え、彼の人生において、それは「若い時の体験」として切り取ってしまうのではなく、彼の全人生において、抜きがたいものとして痕跡をと

どめ、何らかの決定的な影響を与えているという見方をする必要があらう。

二一

藤村の青春時代におけるキリスト教の影響、特に明治二十六（一八九三）年の関西漂泊の旅の頃に彼がキリスト教をどのように把握していたかを窺うことができるものとしてまず、旅先から「文学界」第二号掲載原稿として送った、「馬上、人生を懷ふ」の次の一文があげられよう。

天地悠々いふべからざるの風情その間に存す是境をさして無量といひ、無辺といひ、無限といひ、理想といひ、風流といひ、神といふ。されば月花は無限の風情にして基督は神の風情なり。¹²⁾

特に「月花は無限の風情にして基督は神の風情なり」と記されているところに注目しておきたいところであるが、このように、「基督」を「神の風情」とした表現、もしくは、神の概念を「風雅」や「詩神」といった詩境の形に託して表現している例は特にこの頃の藤村の作品に多く見られる。こうした点に関して笹淵友一は、「基督は神の風情なり」の箇所を指して、「そのような神、キリストの美化が可能であるのは、やはりその信仰が人格の問題よりも、詩的情緒に近づいているからにちがいない」と指摘している。

藤村が明治学院時代に戸川秋骨、馬場孤蝶等学友たちとルナンの『イエス伝』を夢中で読んだことが知られているが、イエス像の形象を情緒性を基調にとらえたルナンへ傾倒していった青春の藤村の心情や、「馬上、人生を懷ふ」等の文が、恋愛の苦しさの為に明治女学校を辞しての旅の途上であったという独特の〈旅情〉によって書かれたもの

であることを考えれば首肯出来る点でもあるが、教会は退いても聖書だけは捨てなかったという事実、更に、こうして作品の上で神のことをたびたび想起しながら旅を続けている心情を推測するならば、笹淵が指摘したように、青春の藤村の神概念が旅の途上に情緒的な詩境の中に変質をとげていったということは簡単に言い切れないと考えられる。むしろ、こうした形で繰り返してキリスト教のことを想起していることにこそ注目すべきであろう。藤村が、教会を離れても、神のことを思い、聖書は捨てなかったという点に、彼の信仰体験の確かな痕跡を認めることが出来ると思えるのである。

その点については更に、帰京後の明治二十九（一八九六）年にルナン体験を記した「西花余香」を表した中で、次の一文が語られているのが注目される。

人はルナンを見て女性崇拜となしたまふか。寛容なる彼が心は女性崇拜といはるゝことをさまたげじ。人は基督伝の著者を見て宗教をなみせりとしたまふか、はた宗教を捨てたりとなしたまふか、優和なる彼が情緒は宗教を捨てたりといはるゝをさまたげじ、また宗教を拾へりといはるゝをさまたげじ。¹³⁾

即ち、この「西花余香」の一文を見ると、藤村は、人生の救済から新生への希望を託して「詩神」を仰望していく、そうした浪漫的詩的発想の核において、かつての青春体験としてあつた信仰は、詠嘆から詩境への仰望という形において変質を余儀なくされていったものの、ルナンのキリスト教への姿勢と『イエス伝』を評価する藤村の内実において推測するならば、藤村においては形としては教会を退き、或いは自らの浪漫主義的キリスト教受容は認めるものの、彼の内実においては一貫して宗教、即ち神につながれているのだという心情を認める事が出来るのである。

そうしたキリスト教への認識は、そのあと活発になっていく詩作においても確認できることであろう。藤村は、明

治二十九（一八九六）年に東北学院の教師になって仙台へ赴くが、それは藤村にとって大きな転換となる『若菜集』を生む体験となったが、この詩業と基督教との関連に関してはすでに拙著『島崎藤村文芸研究』において論じたのでここでは簡潔に触れておくことにする。

『若菜集』には新旧約聖書からの引用、あるいは聖書世界が投影されたものはたくさんあるが、なかでも「若水」「狐のわざ」「逃げ水」はよく知られている。これらの詩作に窺える藤村の青春におけるキリスト教の影響について、ここでは拙論の一部を引用しておく。

そのように『若菜集』中の詩と聖書、讃美歌との関係の多くは、恋愛の喜びであり、青春の春の到来でありを明るくうたいあげていく詩情を託し得る聖書などの箇所が実に巧みに用いられており、藤村の聖書の読み込みの深さを想像させるとともに、笹淵氏の指摘のように、藤村の抒情詩の世界がその半面においては聖書、讃美歌から感じ取った情緒に媒介されることによって深まりを見せていることに気付くことが出来るのである。藤村とキリスト教という点において言えば、そうした詩世界に対する確かな聖書箇所引用や、またそれらが青春の開示を讃歌し人生を肯定的にうたいあげる詩表現において多く用いられていることを考えれば、当時の彼が教会は離れていてもキリスト教に対してはけっして否定的認識をもっていなかったことが想像出来るのである。⁽¹⁴⁾

詩の内容と合致した聖書の引用であったり、聖書に対する肯定的な用い方などを指摘した一文であるが、ここにもうかがえるように、藤村における若い頃のキリスト教体験、聖書体験は、たとえ教会は離れても藤村の精神形成や芸術営為において確かな痕跡を残しているものとして確認できるのであるが、そのように、青春時代のキリスト教体験が、詩業を通して窺える青春時代の特色の一つの特徴として以後の藤村文芸の展開と切り離して認識されていくので

はなく、先に森有正の文を引用したように、多感な青春の時に深く触れあった基督教は彼の命根に痕跡をとどめる形で以後の藤村の人生に深い影響を与えていったことが推測できるのである。そのことがフランス体験において顕著に表れていると考えられるのであるが、以降は壮年時代におけるキリスト教との関連について考察していく。

三

若い頃に教会の門をくぐり、神の前にひざまずき、信仰を誓った体験は、教会から離れたとしてもその人の命の根っこに確かな痕跡を残すものであるという森有正の指摘は藤村とキリスト教を探る上で大きな示唆であり、見通しを与えるものである。その確信の一つとしてまず『家』前後の藤村を上げることがよう。

『家』の下巻七章に

夫は家を寺院と観念しても、妻はもとより尼では無かつた。⁽¹⁵⁾

と書かれた箇所がある。この「寺院」がトラピストの修道院を指しているのは、のちの『新生』の第一巻二において、「ある時は彼は北海道の曠野に立つといふ寂しいトラピストの修道院に自分の部屋を譬へて見たこともある。」⁽¹⁶⁾と書かれている箇所と対応させても推測できるところである。そのトラピストを明治四十四（一九一二年）四月に「中央公論」『家』の下巻第七章を発表したこの段階で取り上げていることに注目する必要があるが、そのことと関連するのが、明治四十五（一九一二年）四月に発表された「トラピスト」という小文である。小文の一部を引用する。

恐らく、私のやうに——北海道まで行かなくとも、自分もトラピストか、と疑ふやうなものは、広い世間にめづらしくなからうと思ひます。墓——沈黙と労働——僅かな音楽——僅かな色彩——丁度あの僧侶達は、私共の生活の光景を極く簡単に形に表して見せて呉れるやうな氣も致しました。私は又、あの接待掛の僧侶が訪ねて行つた美術家の友達を款待したといふやうに、中村さんの、三上さんの、鈴木さんのを款待しました。⁽⁴⁷⁾

この「トラピスト」を取り上げて、小林明子氏は次のように捉えている。

「私」が「あの接待掛の僧侶が訪ねて行つた美術家の友達を款待したといふやうに、中村さんの、三上さんの、鈴木さんのを款待しました。」という修道士の行為の模倣は、単なる形のうえでのものではなく、自己の心情がトラピストのそれと同質のものとして重なりあうことを目指した行為である。教会へ足を運ぶこと、説教を聞くこと、讃美歌を歌うこと、食前の祈祷をすること以前に、藤村は日常に翻弄され迷走する己れの心を受けとめ、抵抗ともいえる立て直しを図る際の依拠するところとしてキリスト教の存在を見、神と共にある自己の生を指向する途上にあつたと考えられるのである。⁽⁴⁸⁾

特に「藤村は日常に翻弄され迷走する己れの心を受け止め、抵抗ともいえる立て直しを図る際の依拠するところとしてキリスト教の存在を見、神と共にある自己の生を指向する途上にあつた」ととらえている点は注目される。これを証明するには、もう少し資料を求めて検証する必要があるが、『家』執筆の後半から明治四十五年頃の藤村は、その時に発表した「日光」の一文からも窺えるように深いデカダンスにとらわれていた。そのような中で、トラピスト修道院での生活を想起し、修道院の「僧侶達」の心境を思いながら、困難を越えて行こうとしている点にも、この時の藤村の中に、若き日の信仰体験の痕跡が確かにとどめられていることを推測することは難くないところであろう。

そうして、新生事件の発生である。大正二（一九一三）年の正月に姪こま子から妊娠を告げられ、三月二十五日に

は、新橋を出発し、四月十三日に神戸港よりフランスへ旅立っている。

『新生』の中で岸本捨吉が節子から妊娠を告げられた後、友人の誘いで墨田川河畔の料亭に出かけた場面で、女中と次のような会話をすることが描かれている。

「しかし、私は何時までも先生に左様して居て頂きたいと思ひます。」（略）「先生だけは奈何かして墮落させたくないと思ひます。」

「私だつて弱い人間ですよ」と岸本が言つた。

「いえ、手前共のやうなところへ斯うして御虫眞にして被入しつて下さるのが、何よりでございます。そりやもうお察しいたして居ります。歌の一つも聞いて見ようといふ御心持は手前共にもよく分つております……」

「よくそれで御辛抱が続くと思ひますよ。そんなにして被入しつて、先生はお寂しか有りませんか……奥さんもお迎へなさらず……」（第一卷一九）⁽¹⁹⁾

藤村が岸本に対する世間の評判として取り入れた箇所なので、全面的に藤村の印象を示しているとはいえないものの、藤村は倫理的にかなり潔癖な人間であつた。その彼が、姪のこま子と数ヶ月にわたつて性的關係を持ち、子供まで産ませることになつたことは、耐え難い苦痛だつたと考えられる。彼は、それまでに自費出版の形で出版してきた『緑陰叢書』の版權を新潮社に売却し、二二〇〇〇円の金額を得、それを、一部を姪の父親である兄広助に渡し、残りは渡仏費用に充てて、再びは日本に戻らない覚悟までしてフランスへ旅立つた。そうしたフランスで、思いがけずフランス戦争に巻き込まれ、戦火を逃れてパリを離れて、フランス中部のリモージュへ移ることになつた。

そのリモージュでの体験が彼の宗教面での大きな変化をもたらすことになつたことが、これまでも指摘されてきて

いるが、そのことを改めて検証してみる。フランスの中でもリモージュ地方は特にカトリック信仰の熱心なところであるが、藤村はそのリモージュについての印象を、後年「オート・ギエンヌの田舎」と題した談話記事において次のように回想している。

サン・テチエンヌ寺院はギエンヌの河に沿った丘の上に建つてゐます。私はよく日曜毎にこの寺を訪づれ、石段に腰うちかけて、カトリック風の寺院の床しさを味ひ、そして敬虔な宗教心に触れるのを楽しみにしました。(中略) 午後の日光が聖女や使徒の意匠されてあるステンドグラスに軽く屈折したり、其の他色とりどりのグラスを通して反映し、静かな御堂に射し込むのを呢つと眺めてをりますと、頭を壓へられ人間の善なる涙が滲んでまゐります。⁽²⁰⁾

ここではリモージュでの体験を実に懐かしく回想している。それだけにこのリモージュの、特にサンテチエンヌ寺院の光景と体験は直接に訪れたその時だけでなく、帰国してからも、深く心にとどまっていたのだろうことが想像できるところであるが、『新生』では「オート・ギエンヌの田舎」で特別な風景として描いた以上にさらにリアルに取り上げられている。

・しばらくその静かな建築物の中で自分のたましひを預けて行くことを楽しみにした。あだかも樹陰に身を休めて行かうとする長途の旅人のごとくに。(略)

彼は斯うした羅馬旧教の寺院の空気の中に実際に身を置いて見て、あの人間の醜惡を覷つくした末に修道院の方へ歩いて行つたばかりでなく終には僧侶に等しい十字架を負ふ人と成つたといふ極端な近代人の生涯を想像して見た。彼はまた、あの男色の関係すらあつたと言ひ伝へらるゝ友人との争闘より牢獄にまで下つた末にデカダンスの底から清浄な智慧の眼を見開いた名高い仏蘭西の詩人の生涯を想像して見た。⁽²¹⁾

・岸本の心は慷慨な口調を帯びた僧侶の説教の方へ行き、王冠の形した古めかしい説教台の方へ行き、その説教台と相對した位置にある耶蘇^{やそ}の架像の方へ行つた。しかし彼は何時の間にかそんなことを忘れてしまつた。(中略)唯彼は石の柱の側に黙然と腰掛けて、仮令^{たとへ}僅^{わず}の聞なりとも『永遠』といふもの^{もの}に^も対ひ合つて居るやうな旅人らしい心持に帰つて行つた。⁽²²⁾

ローマ・カトリック教の教会であるサン・テチエンヌ寺院の建物の内部で〈永遠〉を感じさせる雰囲気に対峙した時の〈旅人〉の心境が示されており、こうした描写からは、主人公岸本が莊嚴な札拝堂の空氣に触れ、眞の信仰に近い敬虔な体験をしている雰囲気^{きん}が漂つてくる描かれ方である。伊東一夫はこうした箇所を踏まえて、次のようにとらえている。

信仰の面からみれば、岸本が神に対して祈るというように描いているのは、詩や『桜の実の熟する時』以外にはみあたらない。神かイエス・キリストのように、明確に対象表現をするよりも、永遠、生命、力、静けさというような婉曲表現を試み、一般的な信仰者のように主に対して祈るという行為を記さないのが藤村の特色である。そのような視点からみれば、『新生』の岸本は藤村その人であると決定することができる。従つてリモージュでの岸本の信仰生活は、やはり藤村自身の宗教体験であるとみなされる。

(略)〈自分のたましひを預けて行く〉とは、神に従うという信者本来の姿勢であり、〈永遠〉といふもの^{もの}に^も対ひ合つて居る^るとは、神と交わるとか、神に出会う、神を感じるというような信仰の神秘的極限を示している。⁽²³⁾

藤村は同じリモージュ体験を、大正九(一九二〇)年九月から翌年一月にかけて「朝日新聞」に連載した『エトランゼエ』では次のように述べている。

羅馬旧教の国ともいふべき仏蘭西に来てから、これまでにもう私もあちこちの寺院を訪ねてみた。あの一切の装飾が人の心の奥を象徴したやうな寺院の内部に見つけるものは、暗いところに三本づゝ並んでとほる長い蠟燭でも、消えさうで消えない常夜灯の紅い光でも、何となく私の心を誘はないでもない。あの巖窟のやうな石壁や石柱の間に漂つて居る静かな空氣も亦、旅に疲れた私を休ませないでもない。どうかすると私は珈琲店へ行つて休むかはりに寺院へ寄つて休むやうな、そんな旅人らしい気軽な心持でもつて、人氣の少ない堂の内に腰掛けて来ることもある。²⁴⁾

ここでは、「旅人」として宗教的雰囲気²⁵⁾に親しみを覚えたというように情緒的なとらえ方をしている。『エトランゼエ』が大正九年九月からの記事であることをふまえて、『新生』を『エトランゼエ』の描写と比較してみるなら、姪とのインセストの告白を描いた『新生』の特殊事情が、リモージュ体験においてより宗教的描写を必要としたという見方も可能かもしれないが、伊東がとらえるように「たましひを預けて」「永遠」といふもの²⁶⁾に對ひ合つて居る」といったやうな宗教に對する描写からは「岸本の信仰生活」であり「藤村自身の宗教体験」を認めることができるのではないだろうか。この視点においては、さらに下山嬢子氏は、

『新生』の〈宗教性〉とはイメージ的には最もキリスト教（特に前論で言及したやうに、マリア像の象徴性などからカトリック）に近いと言つてよく、それは決して仏教や神道のイメージではない。（略）岸本が特定の宗教的形式や儀式を経ずに、実質的レベルにおいて〈幼い心〉という形の〈個を超えた、共同体現成の根拠〉に立ち、しかも心の内部に〈靈的な愛〉を育む必要性の自覚を促されていくということから、『新生』の〈宗教性〉とは、形式を超越した、実質的に最もキリスト教（カトリック）的な恩寵体験とでも呼ぶべきものとして岸本に体験されたもの、とひとまず言えるのではないか。²⁷⁾

というやうに、『新生』に描かれた〈宗教性〉を確かな宗教体験であつたと肯定的にとらえている。私も、このリモ

ージューでの岸本像に明確な宗教性を認める立場であるが、さらに藤村において云うならば、藤村が大正三（一九一四）年になって、フランスで書き始めた『桜の実の熟する時』の中で、リモージュで書いて送ったのは四と五章であるが、その中の特に次の箇所注目したいと考えている。

夕方の静かな時に、捨吉は人の見ない玄関の畳の上に跪いた。唯独り寂しい祈禱いのりの気分に浸らうとした。丁度そこへお婆さんが通るか、つた。捨吉は頭を上げて見て思はず顔を真紅にした。²⁶

『桜の実の熟する時』の中でも、とりわけ情緒的美しさをとどめる描写とされている箇所であるが、この捨吉像には、信仰を真に個人のもものとして〈自由〉な立場でとらえ、神の前に素直に頭こゝろを垂たれている姿が描かれていると感じられる場面である。つまり、この場面と呼応した形で、ここを執筆するリモージュでの藤村がその時、真摯な宗教体験の中にあることが推測される所ではないかと考えたいのである。そうした作者と『新生』の描写を踏まえて、私はかつて、『新生』を執筆する藤村における「信仰の心」が、

——旅人よ。足をとゞめよ。この国の羅馬旧教の季節が来て居る。お前も来て、主の受難を記念する夕方に憩へ。お前に食パンはせる麵パン類、お前に飲ませる水ぐらゐはこゝにも有らうではないか……（百二十一）

という、復活祭を前にして「この国の羅馬旧教の季節が来て居る」ので「お前も来て」「憩へ」とノートに書きとめているところを開いて読み返しているところに、今岸本がリモージュにおける宗教的体験を意識の上に蘇えらせつつ、自らの内部にある神を仰望し、キリスト教に対して肯定的心情を引き出していることが窺われることから読みとることができよう。²⁷

というように考察した。

藤村が若き日に真に神に頭を垂れて、信仰の証をした経験を持っていなければ、あるいは、もし、資質としてキリスト教を、青春の一時期のムードによる情緒的体験だったとしか認識できなかったとしたら、おそらく壮年期のこのリモージュでの体験もなかったと考えられる。そして、深い悔恨と懺悔の思いの中で過ごしたリモージュにおいて改めて宗教の荘厳な雰囲気の中で首を垂れることができたことで、宗教の〈永遠〉にふれ藤村の中に若き日の信仰への情熱が戻ってきたことも想起することができる。

藤村は、その芸術においては、常に恒常性を持続し、人生の「春の到来」「夜明けの到来」を待ち望んで「夜明け前」を書き続けた作家だと捉えることができるが、そうした〈春〉を待ち続ける姿勢の根底を支えているものが、彼の命根に確かに存在し続けるキリスト教体験であり、キリスト教の存在だと認識することができる。そしてそれは、青春時代に『若菜集』を編んで以来一貫して藤村文芸の根幹に息づいていたものであり、それは第三章執筆の途中で倒れた彼の絶筆となった『東方の門』にまで通じていると考えられる。私はその視点で『東方の門』についても

『東方の門』は、まさに晩年にして試みた作者の全てを注いだ「実験」であり、それは小説としてよりも、日本人としての日本の現在と未来への期待を強く抱く作者の、『西』に対する『東』の「門」として日本が真に「活きかえる時代」への希望と可能性、そしてその方法を示そうとした作品であつたであろう。²⁸

と考えている。そのように、青春時代に一度は信仰を持つ時を過ぎた彼の宗教体験は、彼の文芸のすべてに影響を与えていることを認めることができるが、そうした藤村とキリスト教のことについて、その晩年の姿を故静子夫人が回想した言葉を伊東一夫が次のように紹介している。

この人は、ひきとめる人があればふりきってでも、この大寺院に入らないではおられない人だ。またこの大寺院に入る信者の一人として、こがらでめだたない日本人の一人にすぎなかったのですが、なんというこの寺院にふさわしい人であろうか。しみじみとそう思いながら、主人を見送っているうちに、ああこれでよかったのだ、これで主人は救われるにちがいないと思うと、なぜか涙ぐましくなってきました。日本に帰ってからと思いますが、私は主人と『新約聖書』の学習を始めたのです。²⁹⁾

人間藤村がその人生において、悩みと迷いと悔恨の多かった人生をいかに誠実に生き、その芸術と人生においてキリスト教への問いかけを忘れることが出来なかったそのすべてをこの静子夫人の言葉が語ってくれているという事が出来るのである。

注(1) 島崎藤村『桜の実の熟する時』十一（『藤村全集』（昭和四一年一月以降刊行の全集を用いた。筑摩書房）、第五卷卷、五五二頁。

- (2) 島崎藤村『桜の実の熟する時』十一（『藤村全集』、第五卷、五五八頁。
- (3) 長谷川泉『藤村とキリスト教』『島崎藤村必携』学燈社、昭和四十四（一九六九）年四月、三五頁。
- (4) 佐藤泰正×三好行雄×相馬庸郎他「シンポジウム日本文学『島崎藤村』（一九七七年八月、学生社）
- (5) 高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館、二〇〇三年三月一〇日、二六三頁。
- (6) 島崎藤村『五十年の足跡』（一九二一（大正一〇）年三月「信州白樺」）
- (7) 島崎藤村『桜の実の熟する時』三（『藤村全集』、第五卷、四六四頁。
- (8) 伊東一夫『藤村とルナン』『島崎藤村研究 近代文学研究方法の諸問題』明治書院、昭和四十四（一九六九）年三月、一三八—一四〇頁。
- (9) 本多庸一「演説」『第四回夏期学校編「函嶺講話全』』東京警醒社書店、明治二五年九月、一三頁。
- (10) 笹渕友一「藤村とキリスト教」（『文学界とその時代』下、明治書院）
- (11) 森有正『近代精神とキリスト教』河出書房、昭和二十三（一九四八）年、（昭和四十五年に講談社より増補改訂版。本論

は後者、一二四頁

- (12) 島崎藤村『馬上、人生を懷ふ』「文学界」二号、一八九三（明治二六）年二月（『藤村全集』十六卷）
- (13) 島崎藤村『西花余香』「うらわか草」、一八九六（明治二九）年五月、後、『二葉舟』（一八九八）年六月に所収
- (14) 細川正義『島崎藤村文芸研究』第五章藤村詩とキリスト教（二〇一三年八月、双文社出版）
- (15) 島崎藤村『家』下七章（『藤村全集』四卷、三四一頁）
- (16) 島崎藤村『新生』第一卷二（『藤村全集』第七卷、一九頁）
- (17) 島崎藤村『トラピスト』（食後）（一九二二（明治四五）年四月）初出「十人並」第三話、一九二一年九月（『藤村全集』四卷、四七二頁）
- (18) 小林明子『島崎藤村 抵抗と容認の構造』（二〇一二年一〇月、双文社出版、一四一頁）
- (19) 島崎藤村『新生』第一卷一九（『藤村全集』第七卷、五二頁）
- (20) 島崎藤村『オート・ギエンヌの田舎』（大正六（一九一七）年八月「新家庭」）（『藤村全集』第六卷、五九〇頁）
- (21) 島崎藤村『新生』第一卷百三（『藤村全集』第七卷、一九五頁）
- (22) 島崎藤村『新生』第一卷百四（『藤村全集』第七卷、一九五一九六頁）
- (23) 伊東一夫『島崎藤村における信仰の構造』「島崎藤村研究」二十一号、双文社出版、平成五年（一九九三）年八月、四六頁。
- (24) 島崎藤村『エトランゼエ』八十七（『藤村全集』第八卷、三七二頁）
- (25) 下山嬢子『島崎藤村』（『新生』の〈宗教性〉——『新生』論（その二）——）（一九九七年一〇月、宝文館出版、二五〇頁）。
- (26) 島崎藤村『桜の実の熟する時』四（『藤村全集』第五卷、四七九頁）
- (27) 細川正義、前掲書、三七三頁。
- (28) 細川正義、前掲書、五〇五頁。
- (29) 伊東一夫、前掲『島崎藤村における信仰の構造』、四九頁。静子夫人は、藤村の死後も宗教への求めを深めていき、昭和二十五年、東京四ツ谷のイグナチオ教会で受洗している。

本稿は二〇一四年一二月五日、六日に韓国仁川大学校で開催された、「第13回 韓国日本基督教文学会&日本遠藤周作学会共同学術発表大会」で講演したものをもとに大幅に修正を加えたものであることをお断りしておく。

（ほそかわ まさよし・関西学院大学文学部教授）